三輪田眞佐子刀自の家庭

龍東居士

教育家としての刀自

眞佐子刀自（天保十四年一月一日生）は我國女子教育者の大立物にして、その如何なる人物なるやは予が今更ら喋々辨するを要せざるべし。その幼少なる頃より、早く既に辛酸の中に人と成り、浮世の荒浪に身をもまれ、賢母の人格を爲しぬ、人の妻となりてはよく貞、人の母となりてはよく慈、年若くして良人に別れ單身不屈、愛子を養育する外研究修德に入念せらるゝこと殆んと相想の上に入たりき。終始幾千の辛苦は益々刀自が德操をして光あらしめ、終始篤學の精神は刀自をして才學に長ぜしめたり。聘せられて公家に入ること幾度、誘導訓育曾て過たることあらず。やがて家塾を開かれ女子の教育に從事せらるゝこと數十年、常に人格的感化に由りて有爲の婦人を門下に出せしこと、惟ふに夥多なるべし。

幾多の忠魂永へに眠れる九段の西に一の女學校あり、これ刀自の設立されし三輪田高等女學校なりとす。本校は明治三十五年四月の設立にかゝるものにして、都下數十校の多き女學中第一流に位して遜色なく、その生徒中には中流上流社會の子女多く、從つて刀自が上流社會に重き信用を得るに至れるなり。或は何々慈善會、或は何々婦人會或は何或は何と、種々の事業にたづさはりて席の未だ暖まるを知らざる實に驚くばかりなり。刀自は實に一の女子教育家たるのみならず。社會教育家にてあるなり。

刀自が養嗣子を文學士三輪田元道氏となす。氏は久しく刀自が薫陶の下に成長せられたるを以て、その人格その品性、刀自が兒たるに愧ぢざるべし。謹んで母刀自の主義を奉じ、勉めて母刀自を補けて女子教育のために盡力せらるゝなり。若しそれ其見識に至りては、新聞に雜誌に將た演舌によりて既に世人の知る所となれり。

その家庭

刀自の家庭は所謂一家團欒的にして人目も羨むばかりなり。而して、その家族は刀自の養嗣子元

道氏（明治六年三月生）、その夫人正子（十四年八月生）、長女良子（五歳）、長男元也（二歳）、夫人の妹一人、女中六人下男二人にして、その外塾生四十人あり。而して夫人は正子と云へるが本名なるも、刀自の眞佐子と同音なるを以て便宜上正の勢に同音相通ぜるより勢子と呼べるとなん。住宅は女學校内にありて常に塾生と起居を共にし、以て範を生徒に示さんと勤めしものに似たり。

刀自は儉約的克己的生活を理想とし、勤めて奮鬪的に處せんとせられつゝあり。而して各其分擔事業は豫め之を定め、刀自は學校の管理及び婦人社會の爲めに、元道氏は内外の交際に就て、夫人は家庭生活事務を司とる事とせり。毎朝事務分擔は刀自は室内の整頓、氏は庭の右側、夫人は其左側、下男は庭外を掃除することゝなせるを以て如何なる日に於ても此義務を怠る事なしと。

食事は最も衛生に注意せるを以て、無法なる事は絶てなすことなく、日々の定めとして刀自及び夫人は牛乳肉食、氏はビール牛乳、小兒は牛乳を常食となし、ブドー酒は醫師の勸めにより一家少量を飲用すと。刀自は家憲として日本酒を嚴禁し來客ある時と雖も決して日本酒を用ふることなし、その理由は日本酒はアルコール質ありて人体に害あるのみならず、客によりては長き時間を要するゆへ、家族の迷惑を蒙むること少なからざればなり。實に日本酒はアルコール質多き爲めこれが害を受くる人あるは人の知れる所、又平常靜かなる人にても酒の爲め暴となるものあるは事實なり。殊に婦人の酒に醉へる程見苦しきものはあるまじ。

刀自は一家擧つて樂むを好み決して個人的なるものは成るべくこれをさけられたり一週間に一度は安息日を定め、家族全体にて市外に散歩なし以て一日を快く暮し、雨中には家にありて各欲する讀書を爲しとかや。樂むに團体的主義を採られし結果、圍碁の如きはこれを禁止せり。又家庭の道樂として花園を設け、各々別にその欲する植物を培養せり。故に梅、桃、大根、蕪、茄子の類は園内に充滿せり。家畜は餘り好まざるも犬は甚

だ愛せられ、現に四疋庭内に嘻々と戯れ居れり。

克巳的生活を主とせる刀自の主義は全家によく行き渡り、元道氏及び夫人が子を教育さるゝにもこの方針を以てせり。成るべく小供に浮華なる風を爲さしめざることに心がけられ、衣服の如きも木綿の粗末なるものに限れり。茲に一つ注意すべきは、小供をして母親よりも刀自に親しまんことを勸め、菓子などを與ふるにも必ず刀自手づから授けることとなり、何故斯の如きことを敢へて爲すやと云ふに、子を育つるは親に如くものなしと雖も、稍々もすれば親は愛に溺れて度を失することなきにしもあらず、故に刀自の嚴正なる薫陶を受けしめなば寛嚴宜しきを得るならんとてなり。

子に良教育を施さんと願ふは一般親の念とする所にして、誰か不良なる子供を養成せんとするものぞ。されど、餘り子を愛するの極、却つて不良なる結果を來すことあるは世上屢々見聞する所たり。寛嚴その中庸を得るは仲々六ケしきものなり、茲に具体的に說かずとも、皆百も承知せる所なれば、尙此上とも充分の注意ありたし。

刀自は一家に秘密あることを此上なく嫌はれ、何事も心にあることは談り合ひ、少しのへだてを心に有せしめざるなり。秘密の第一歩は金錢にあるものなれば、各自相當の金を毎月與へ少しの不自由を感ぜしめず、その上一人毎に貯金を爲さしめて心に餘有あらしむ。又人生は朝露の如く賴み難きことあれば、万一を慮からざる可らずとて、元道氏七千圓夫人四千圓の保險に入れりと、用意至れりと云ふべし。かくて又秘密はあるを欲せざれば何事も私なしと雖も、書狀のみは宛名以外の人は開封するを許さゞるなり。これ各人の人格を重ずるより來れるものにして、斯くあらねばならぬことなり。

刀自は多く日本風を主義とせらるれど、器具器械の如きは所謂文明の利器を用ひること、せり。應接室の如きも西洋式となし、生徒教授の材料に供せんことをもはかれり。或は日本主義と云ひ或は西洋主義と云ふも、各一利一言ありて何れを否定し何れを肯定すること能はざるものなりと